

最優秀賞（神奈川県知事賞）

書で伝える

横浜共立学園中学校 3年 ^{すがい}菅井 ^{みゆ}美結



現代のコミュニケーションツールというとスマホやパソコンがあげられる。指一本で画面やキーボードを操作することで簡単にメッセージを送ることができる。なんて便利な世の中なのだろうと日々感心する。しかしその便利さにより、現代人の生活から遠ざかってしまったものにも目を向けたい。

書道部に所属している私は文字を「書く」機会が多くある。そして文化祭では毎年、見学に来た受験生に「必勝」「頑張れ」といった作品を書いて渡す。今年の夏も同じようにひたすら書いているとふと、あることを思い出した。それは去年の文化祭のことだ。

いつものように受験生に私が書いた作品を渡していると、ある保護者の方からこんなことを言われた。「娘は学校のマークがはいったグッズよりも、こういう在校生の温かい気持ちがこもった世界に一つだけのものが勉強のやる気になるそうです。」と。この言葉を思い出しはっとさせられた。

「気持ちがこもった」「世界に一つだけ」と思われるものとはどのようなものだろう。「必勝」や「頑張れ」といった言葉本来が持つ意味からだろうか。それとも、印刷される文字より人間味のある完璧ではない文字だからだろうか。

私の答えはどちらも「ノー」だ。おそらく、文字を書くときに思い浮かべる受験生達の顔や合格してほしいと願う気持ちが、筆をつたい、文字に表れ、世界に一つだけの作品となるからだろう。

手紙も「書く」ことで温かい気持ちを表現できる作品の一つだ。相手のことを思いながら、気持ちを込めて書く。喜んでもらうために絵を描いたり、色ペンで装飾をしたりする。最後に封筒を選び封をして、ポストまで行き、手紙を入れることで、やっと世界に一つだけの、永遠に残る作品を相手に送ることができる。手間はかかるが、この動作一つ一つの重みが、手紙の一文字一文字によく表れているだろう。そしてまた、それを受け取った人はその文字に触れ、鑑賞することで、まるでそこに手紙を書いた相手が実際にいるような気分になるだろう。

機械やコンピューターではどうだろうか。たしかにメッセージアプリでスタンプを送ったり、絵文字を送ったりすると「書く」よりもはるかに豪華な装飾ができる。

いろいろなフォントも使えるし、読みやすい。だが少し立ち止まって考えてみてほしい。それは相手の動作の重みを、気持ちを直接触って手から感じることのできる、永遠の作品になるだろうか。唯一無二の作品になるだろうか。

近年、デジタル化が進み、いつでもどこでも人とやり取りできるようになった。そのおかげで出来るようになったことがたくさんある。例えば、どんなに遠くにいても誕生日メッセージを送ることができるし、ちょっとした喜怒哀楽も一秒で伝えることができる。機械やコンピューターは私たちの日常生活をより豊かにしてくれた。だが、同時に「書く」ことの重要性が忘れられているように思う。だからこそ、もう一度「書く」ことで生まれる作品のよさを再認識してほしい。

コミュニケーション手段をすべて手書きにするべきだと主張しているわけではない。ただ、現代人には機械やコンピューターを使ったデジタルの作品と、「書く」ことで生まれる、永遠に記憶に残る作品を使い分けるスキルが必要だと思う。

これから効率性や利便性がより追求され、機械やコンピューターに頼る機会が増えていこう。だからこそ私は主張したい。「書く」ことでしか表現できない作品の良さを。機械にはだせない、気持ちのこもったその一文字一文字の温かみを。

心に永遠に残る、世界に一つだけの美しい作品を私はこれからも書いていきたい。